

## D. ケスラー 1909年から1934年までの初期ドイツ社会学とその生成環境

著者	Kasler Dirk, 楠 秀樹
雑誌名	白山社会学研究
号	10
ページ	81-89
発行年	2002
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00007545/">http://id.nii.ac.jp/1060/00007545/</a>

## D. ケスラー 1909年から1934年までの初期ドイツ社会学とその生成環境

楠 秀樹\*

本文は、Dirk Käsler, Die frühe deutsche Soziologie 1909 bis 1934 und ihre Entstehungs — Milieus. Eine wissenschaftssoziologische Untersuchung, Opladen, Westdeutscher Verlag, 1984, Kapitel A, Einleitung S. 1—8. までの訳出とともに、訳者序文を添えたものである。

また、下線の多様はケスラーの本文そのままである。発表にさしあたり、ケスラーから出版者や恩師諸氏への謝辞を省略させてもらった。紙片の都合上 Einleitung 以下はいずれ発表の機会を得たい。

### 訳者序文

#### 1

D. ケスラーは、1944年生まれ、ミュンヘン大学、ロンドン大学で学び、ミュンヘン大学に戻り、ハンブルク、ケルン各大学を経て、現在マールブルク大学 (Philipps-Universität Marburg) の教授である。主著として、今回訳出する『1909年から1934年までの初期ドイツ社会学とその生成環境』(1984) 以外に、新しい年代から一部例に挙げると、1997. Soziologie als Berufung. Bausteine einer selbstbewußten Soziologie. Opladen: Westdeutscher Verlag (『職業とする社会学—自覚する社会学の基盤—』)。

1995. Max Weber. Eine Einführung in Leben, Werk und Wirkung. Frankfurt/New York: Campus (『マックス・ヴェーバー—生涯・業績・影響—』)。

1991 Der politische Skandal. Zur symbolischen und dramaturgischen Qualität von Politik. Zusammen mit Hans Peter Albers, Leonarda Castello, Carsten Germis, Peter-Jakob Kelting, Matthias Klupp, Sabine Redlin, Jochen Rimek, Franz-Josef Schmidt, Frank Smeddinck und Thomas Steiner. Opladen: Westdeutscher Verlag (『政治的スキャンダル—政治の象徴的かつ劇的性格—』)。

1985. Soziologische Abenteuer. Earle Edward Eubank besucht europäische Soziologen im Sommer 1934. Opladen: Westdeutscher Verlag (『社会学的冒険—E. E. ユーバンク1934年夏にヨーロッパの社会学者達を訪れる—』)。

---

\* 東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程3年

1979. Einführung in das Studium Max Webers. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung (『マックス・ヴェーバー研究概論』)。

等他多数あり、研究論文を含めるところでは紹介しきれない。

ただし、その名をヴェーバー研究者たちに知らしめたのは、1972年の Max Weber. Sein Werk und seiner Wirkung, München, Nymphenburger Verlagshandlung (『マックス・ヴェーバー—その業績と影響—』)の編者として、ヴェーバーの論文と、ラインハルト・ペンディックス、ヘルベルト・マルクーゼ、ユルゲン・ハーバーマス、ヴォルフガング・モムゼン、カール・レーヴィットなどの錚々たる顔ぶれの論文を選択、配列したからであった。このような業績から見ても、その関心の中心はM. ヴェーバーにあるのだが、彼が他のヴェーバー研究者に対して独自性を発揮するのは、その丁寧にして膨大なヴェーバーのテキストのみならぬコンテキストの整理にある。またそのコンテキストの整理は、ヴェーバーのみを中心に目だって引立たせるために描かれたものではないからこそ、むしろヴェーバーの社会的位置を読者に知らしめ、同時に他の社会学史、例えばジンメルやテンニエスの位置、あるいは初期のドイツ社会学史全体、さらには後のドイツ社会学史や他国の社会学史に大きく寄与することも可能なのである。その膨大な初期ドイツ社会学史の整理は、彼の他のヴェーバー研究と対になって初めて彼のヴェーバー研究への貢献度として測ることができると言ってもよい。

日本でのケスラーの本格的な翻訳と紹介は、1984年の森岡弘通邦訳『マックス・ヴェーバー—その思想と全体像』三一書房があるが、これは、ケスラーの『マックス・ヴェーバー研究概論』(1979)の邦訳である。その書の訳者森岡も、ケスラーの邦訳の動機として当時のヴェーバーをめぐる一見目だった論争的解釈の顕示などではなく、「マックス・ヴェーバー」そのものに地道に帰る業績として心惹かれたという。この79年の書の後、95年にもケスラーはヴェーバー研究を発表している。79年の書も相当なボリュームながら、それを概論(Einführung)としてその後も継続的に研究を展開した成果が95年の作品だと考えられる。このことから、彼の業績の多産さと、その努力がうかがわれる。初期ドイツ社会学全体の鳥瞰図となる今回訳出の書も、およそ700ページに渡るが、彼のヴェーバー研究の傍証とも考えられる。しかしながら、「初期ドイツ社会学」、主用な登場人物、時代範囲と空間範囲からケスラーの限定したこの範囲にかかわる多くの日本の研究者にとって、本書は甚だ有用と思われる。この書が、90年代以降にも邦訳されようとしなかったことは驚きである。したがって、もう一度整理すると、本書の邦訳は以下のことを意味する。①D. ケスラーというヴェーバー研究者の業績を彼のヴェーバー研究と対をなす本書の邦訳によってはじめて完全に日本に紹介できる。それはヴェーバー研究にとっても有益である。さらに、②この邦訳は、ヴェーバー研究に限らず、多くのドイツ社会学、ドイツ社会学史、社会学史全般の事実関係や資料、その方法論や認識論の研究者に寄与するところが多い。

さて、ここで訳者である私自身の邦訳への関心を述べておくと、日本におけるドイツ社会学史への資料的、方法論的貢献ばかりを目標としているのではなく、自分自身の研究との関連でこれを意図しているのである。それは、上記二つの意義に加えて第三の意義、つ

まりヴェーバー研究、ドイツ社会学史という以上に、「社会学」観の問題である。

私は、従来からM. ヴェーバーを取り上げてきた訳ではないが、一貫してドイツ社会学を取り上げてきた。それは、J. ハーバーマスへの関心であり、彼の現在の社会的位置を鑑みるならば、一人の社会学者というよりは、統一前の西ドイツから現代ドイツに至る戦後ドイツを代表する「知識人」、公共的な発言者というイメージが強い。また、彼の議論はドイツの文脈に限らず、世界的とも言える議論や政治発言となっている。それ故に、むしろ、ハーバーマスはドイツというコンテクストにおいてどのように出現してきたのかが問われるべきだと私は考えた。その際に、彼にはフランクフルト学派第二世代の旗手という名前も用意されていたが、この系譜をそのままに信用する訳にはいかなかった。また、そこから、私の議論は、その学派第一世代の歴史を確認する作業に至った。その際に、学問の歴史、なかでも社会学史との関連で資料的にも方法論的にも着目した一人がこのD. ケスラーであった。

ケスラーが今年2001年3月に宮崎大学教育文化学部の招聘によって同大学にて講演するため来日した際、直接質問する機会を得た。その際、彼から、フランクフルト学派がドイツ社会学史において重要な役割を果たしていないのになぜ学派史研究者の私が翻訳を試みるのか尋ねられた。その時の私の答えは、学派の位置が社会学史や大学制度史のより広いコンテクストの中で語られるべきであり、その意味ではケスラーの議論と矛盾するものではないというものであった。しかし、私は、後にさらに二つの理由を確信した。一つには、社会学史方法論ばかりでなく、テクストとコンテクストの関連から地道に対象を構成し直す認識論をケスラーと共有していること。次に、方法論や認識論と切り離せない社会学の使命観を彼と共有していることである。その使命観は次の節で紹介するが、それは、ケスラーにとってはヴェーバーの思想であり、私には、フランクフルト学派の批判理論の思想や、フランスの社会学者ブルデューの思想とも相通じるものだと思えるのである。

ケスラーの公開するホームページによれば、科学としての社会学は、歴史的に格闘し、獲得されたものでなければならず、彼の場合マックス・ヴェーバーとも格闘してきたが、現代の社会学思想にも勢力的に取り組む。それがエリ阿斯、ブルデュー、ハーバーマス、ギデンズといった人々であると明言している。先日、来日したケスラー自身に私のブルデューへの関心（「場」の理論の受容）を述べると、彼も自らの社会学史理論と多いに共通し、しかも学ぶところが大きいと返答してくれた。

## 2

ケスラーと、ブルデュー、そして批判理論の文脈で社会学の使命について考えるならば、あるドイツでの論争をここで紹介する必要がある。

それは、1996年の「社会学をめぐる論争」あるいは「社会学の終焉論争」であるが、先ず最初は、アメリカのランドール・コリンズが「1980年代の社会学は停滞しているか」と問うた事が関係しているといつてよい（*American Journal of Sociology*, 1986, Vol. 91, 6, pp. 133-1355.）。これに対して、さらにアメリカでは、社会学者アーヴィング・ルイス・ホロウィッツが1994年に『社会学の崩壊』（*The Decomposition of Sociology*, Oxford, 1994）を発表する。さらに、この議論をドイツのツァイト紙で論じたのがアメリカの社会学者リチャ



ード・セネットによる「社会学の終焉」である(DIE ZEIT.1994.9.30.)。これに前CDU(キリスト教民主同盟)本部長ヴァルムフリート・デットリンクが、社会学科が「根無し草の学科」であると語ったことが論争の発端である(DIE ZEIT.1996.1.5.)。

セネットは先ずこう言っている。「アメリカの大学において、社会学は、もはや有能な学生たちからそっぽを向かれている。ハーバードのようなかなり重要な高等教育機関でさえ、すでに社会学部を完全に閉鎖しようとしている。また、政府は、もはや社会学研究に投資しようとはしない」。社会学はしばしば非科学的、ジャーナリズム的、あるいは文学的だと非難される。

さらにセネットは、アメリカのホロウィッツの見解を紹介する。社会学の崩壊は、68年にその責任があるというのである。ホロウィッツも、社会学は、一方で、近代の抑圧やそこからの解放についてのうわべだけの表現を与えるだけのものとなっているものと述べる。多元的文化に間する言説、フェミニズム、黒人の自己意識、同性愛理論などがそれである。つまり、これらは、マルクス主義の影響の強い純粹批評となっていると言うのだ。これら議論には、資本主義を悪とし、社会主義を善とする反米、反西欧の偏向があるのだと批判する。例えば犯罪社会学において、犯罪が資本主義社会の矛盾であるという例を彼は挙げる。他方で、68年以降の社会学には、非政治的で人間の内面を志向する研究へと進んでいるものもある。これがホロウィッツの見る社会学の崩壊であった。

セネットはこのような非難に同意しない。社会学は、人類学、歴史学、哲学、都市開発論や法学に影響を与え、貢献した。「社会学が『まじめな』科学へと回帰しようと模索することに、一部の六十年代の社会学者たちが反抗した一方で、大部分は、社会学を新しい主題や方法の大幅な領域に開放しようと尽力している」。また、社会学がイデオロギー的であるとの批判とは反対に、社会学はそもそも独自の学問なのかという問いに足を引っ張られることがあるのだとセネットは述べる。

「社会、とりわけフェミニズム、同性愛論、文化研究についての新しい知の言説は、とにかくアメリカ、イギリス、フランスで、または精神科学においてより多くの関心をえぐりだす。このような新しい社会についての科学的言説は、ホロウィッツのように甚だ卑近なものとして扱おうとせずとも、確固たるイデオロギーを通してではなく、自己批判を通してこそ形作られる」。

セネットは、社会学の危機について考えるのに、ホロウィッツのような議論はほんのきっかけで、本当はもっと現代社会の状況と関連してこの問題が根深いものであると考えている。ホロウィッツのようにマルクス主義を毛嫌いするような論調もあるが、社会学が彼らの資本主義社会の分析と関連していることに間違いはないことをセネットは認める。社会学は、個人の社会的経験を批判的に掘り下げて分析する傾向がある。しかし、社会学的分析は、情報化社会の中であって、自分達の経験に関する知識を浸透させるが、そのことによってセネットは、社会の不透明性に対する主体的な試みに対して人々が冷めて行くことを助長しているのだと述べている。

「英国の前首相マーガレット・サッチャーが十年前にした発言は有名である。『社会

ではなく個人とその個々の家族のみがある』。それは何気なく述べたにせよ、深層にある心理についての私の意見を代弁してくれた。その言明は不安を呼び起こす。つまり、アレクシス・トクヴィルがすでに百五十年も前に述べたような不安だが、それは、市民大衆にとっての公共的領域が、感情的には疎遠な領域として発達する社会である。その領域で市民はたしかに活動できるが、しかし、そこから放り出されているようにも感じるのだ」。

しかも、セネットは、社会学が社会的生活の機能を解明しつつも、これを諸個人の主体的意味との矛盾として提示しないようになってきていると考える。個人と社会との経験的不協和は、「結果的に調和している社会の合理性」という観点から無視されるようになってきている。セネットが感じているのは、社会学が観念的で根本的な原理を執拗に問うのだが、それは批判的と言うより一つの娯楽的な読みものとなっていることである。つまり、社会学は、残念なことに、今や「無意識的に」現代を反映するものとなってしまっているということなのだ。

この議論に反応したデットリンクはどのような議論をしているであろうか。簡単に言ってしまうと、大学の社会学科が意味を失いつつあるというものなのだが、それは、社会学の教師と学生の減少を根拠としている。デットリンクの論調は最初から社会学が象牙の塔の学問か、政治批判にしかならないとでもいったそうである。彼が無視できないと認めるのはドイツではシェルスキー、ダーレンドルフ、ハーバーマスといった人々である。もちろん、どちらかと言えば好意的に持ち上げるが、そのあと、社会学者達がベルリンの壁崩壊やソ連解体を予測できなかったことについて批判する。「社会学者たちは、ついこの間まで、分析的にも診断的にも輝いていた」と題した節で彼は議論を続ける。「とにかく、社会学において長い間支配的であった構造機能主義とシステム論の方向性は、疑う余地もなく、この学科が社会システムの維持の条件を優先して探求し、闘争、変化、オルタナティブに対立し、次第に焦点を反らすのに貢献した—そして、社会学は決まって長ったらしく退屈なものとなった—」。社会学は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、近代社会の批判と危機の学問として、よりよい社会を考える学問として希望があったではないか、とデットリンクは社会学の草創期を省みる。その批判は主に三つあったのではないかと彼は考える。第一にマルクスのような人間疎外の批判、第二にヴェーバーのような民主主義のジレンマである官僚制の批判、第三に近代の進展による道徳の喪失の批判である。「それはもちろん、近代の矛盾を止揚するであろう改革への道であった」。しかし、現代において、国家のグローバル化に対し、社会は個人化の傾向にあり、国家と社会の対話は引き裂かれている。

そこでデットリンクは、現代の社会学者が国家と社会に関して積極的に提言している例として、ギデンズやオッフエを挙げる。ギデンズもオッフエも、国家と社会の関係が福祉国家の形態で過剰な国民の保護により生じる財政危機や労働の動機の危機、脱産業化する産業構造に対する国家介入の有効性が疑問視される合理性の危機、以上に基づく福祉国家の正統性の危機を論じる。もちろん、デットリンクは、彼が「グローバル化」や「個人化」の議論を借用しているウルリヒ・ベックの名を忘れず、「危機社会」を社

会学の議論の終焉と結論づける。社会学は社会の合理的な理解から退いてしまったと。

「かつての社会学的啓蒙であったところを、今や、風土研究者、環境経済学者、遺伝子生物学者、エネルギー効率の専門家が支配する」。社会学は独自の総合的な方向性にイニシアチブを取るのではなく、むしろ様々な専門領域に解体されていくというのである。

この論争について、ケスラーは、同新聞紙上でデットリンクの三ヶ月後に意見を述べたが、あたためて次のように自分の意見を自らのホームページ上で表明している (<http://staff-www.uni-marburg.de/kaesler/sub-main/Invitation.html>)。

1. 学問としての社会学は、社会的歴史的現実の複合物に対する素朴な見方を、こうした諸関係の複合物にまさに対応した見方へと変更可能にする。
2. それによって、社会学は、人間が個人的かつ社会的見地から、自己実現の可能性について、学問的に築かれた洞察と知識を獲得し、その時に生じる諸困難と限界性を知ることとを可能にするものである。
3. こうした意味での学問としての社会学は、他の社会科学と結びつきながらも、一つの独自の手段となる。すなわち、社会秩序における諸個人の自己実現の諸要求を構成的に結びつけて行くことを可能にし、人間として尊厳ある社会秩序を啓蒙する概念の発展に対する唯一の手段となる。
4. 学問の社会学が全く実質的に社会的現実の自己反省性に関する知識の修得に寄与するのにしたがって、啓蒙的で批判的に社会的現実の創出に協力することが社会学の最も大きな功績である。」

ケスラーは、大学のホームページということもあって、形式的なことを述べている印象があるが、結局は、セネットの述べるような時代の無意識を反映する社会学、知的娯楽としての社会学、そして、デットリンクが述べる他の専門学科に道を譲るような社会学に対して、あらためて社会学の批判的意味を確認する必要を説いている。もちろん決定的な意見とは言えまいが、ケスラーのような立場の人々が、フランスから参加したブルデューの議論などとともに、社会学の批判的かつ科学的な社会的機能の復権を唱えている。ここは論争の紹介が目的ではない。以下でケスラーが「まえがき」として述べる部分、つまり

『1909年から1934年までの初期ドイツ社会学とその生成環境』という議論の概要を見ていただければ、彼の社会学への使命と、本書の意義が理解してもらえるであろう。

### まえがき

マックス・ヴェーバーと社会学の「古典となる学者」たちについて、とりわけ長い間、研究に携わり、私は、初期ドイツ社会学の発展を、きちんと歴史・社会学的に分析することが差し迫って求められているのだと確信した。一ドイツの高等教育制度のなかに専門的学科としての「社会学」を形作る際の制度化や専門化の過程、また教育システムにおける社会学の普及の過程、こうした事柄を背景にしてはじめて、個々の社会学者や「学派」の実際の影響や意義について語ることができるのである。つまりかかる背景の分析がまず行われ、それを手がかりにしてはじめて、社会学の体系的受容や影響の研究へと次の一步を進める

ことができるといえるのである。

続けていうなら、かかる分析は、現代社会学の専門的な自己認識を歴史的に基礎づけられた原理の上に据えるのにも貢献することになる。独自の学問としての歴史に欠けている認識や理解の欠如は—そのうえ、よくあるのは、要するに「古典となる学者」の殿堂を打ち建てることだ—、安易にかつての問題設定の反復を規定している。私の見解では、社会科学こそが、社会的制約、社会的成立、そのうえにその教えの内容の相対的に独立したダイナミズムを浮き彫りにし、さらなる展開においてそれらに関係づける特別な義務を負っている。

同時に、私は、社会学が常に社会の自己解釈の形式として考えられると同時に、社会学自身について認識する手段としても考えられうるのだと確信する。かくして、1909年から1934年までのドイツ社会学の形成段階を叙述することで、当時の社会学の発展に著しい影響を与えた対照物として、ヴィルヘルム帝政期のドイツ、あるいは、ヴァイマル共和国期のドイツにおける「政治文化」の様々な発展段階も、付属的に、研究され、叙述されうる。

もちろん、社会学が学問の名に値するのであれば、国際的なものであらねばならず、したがって、観念と認識に国境があってはならないのだという反論もあるだろう。様式的、形式的諸原則も、地理的な境界に拘束されるものではない。それにもかかわらず、学者たちによって取り扱われるドイツ社会学、つまり、ドイツ語で書かれ、教えられ、当時のドイツ帝国の範囲における教育制度によって主に社会化され、そのような制度のなかで彼らが教え研究した社会学と、フランス、イギリス、アメリカ、その他の国々における同時代の社会学とは、区別しうるものである。—加えて、ここで部分的ではあるが、われわれがかなり意識的試みとして、まさに「ドイツ」の社会学だという場合、やはり、われわれは、独自の<sup>(1)</sup>ドイツ社会学を描きだしていることになる。ここで中心的で重要な問題だと思われるのは、いかなる「国民的」哲学と思想の伝統を背景にして、様々な「国民的」な社会学があるかということである。しかし、単なる哲学的伝統のみでなく、ここでは、意味論的、宗教的、政治的、その他の伝統も重要である。これら伝統や、「流れ」を、私は、純粋に観念史的で、高度に抽象的な叙述から、社会学的に利用可能な水準にまで、「環境」(Milieu)という研究上の尺度で置き換えようと努力した。

私は、社会の自己理解に一つの決まった形を見出すという意味でのいわゆる「社会学」という学問的試みの中で、社会学の発生も同様なものだとして研究しようとしている。まさにそれゆえに、私の意図するところは、ひょっとすると目下のところ、社会学というものが一種の「中央展示会」においてかろうじて自身の歴史によって把握されるだけで、結局は「不毛」なものだという事実を指し示していると解釈されかねないような、そして、純粋社会学には本質的でないような、そんな主題の設定である。一つの学問がその歴史を思い起こそうと努めるところ、すでにその自己理解は損なわれているといってもたしかにまちがいはない。そのような学問は、「前進」、また「前進」と、(より)成功を確立するよう促すものではなく、むしろ、振りかえることを余儀なくされ、伸び悩んでいるかのようなものである。しかし、かように振りかえることは、有益でもありうる。それは、学問に、公理、前提、出発条件を強いる。そして、この振りかえりは、成果と「偉業」、しかし、場合によっては、「原則的な」、「構造上の欠陥」も「吟味」することを許す。それによって、その後の視野が開かれるのである。

私の叙述も一つの「終着点」から始まっているということは否定できない。しかし、私は、われわれがすべての歴史的な学問とともに分かちもっているこの問題も、深刻な非難だと認めることはできない。私が問題としたいのは、もちろん、「歴史自身が望む」歴史を再構成するということではない。そもそもそんなことが可能ならばの話だが。私にとって、過去への関心は、現在の実践的企てや意図にとっての「しもべ」のようなものである。過去、あるいはわれわれが過去から捉えるものとは、社会的かつ個人的なアイデンティティー構成を助けるだろう。

その際、ドイツにおける今日の社会学にとって、初期ドイツ社会学の研究の重要性は、ルネ・ケーニッヒがすでに1960年に、まさに20年代は「今日なおも、いきいきと以前同様、ドイツの克服されざる過去の一部分として書きとめられる」と強調していたことである(Réne König, Studien zur Soziologie. Frankfurt am Main, 1971, S.33)。そして、ケーニッヒがヴァイマル共和国の社会学について、その研究で主張するところによると、われわれ自身もまた、われわれの研究の認識目的と見なされるというのだ。「われわれが二十年代の社会学を扱う時、つまりそれは、古本の歴史ではなく、現在の実存の解明に貢献する。この使命が情け容赦なく果たされてこそ初めて、様々な集団がドイツの世論を虚偽意識に閉じ込めた魔法の結界がとかれる…」(a. a. O., S.35)。

つまり、特定の時代領域のその一つ前、「社会学」という学問の固有性を形成する特定の領域のその一つ前にさかのぼった多元的な諸過程の描写が重要である。これらについて、必然的に、方法論的にどう取り扱うのかについて問われることになる。まさに先に述べておいた「認識関心」の点で、すなわち、今もなお盛んに営まれている「社会学」という学科のアイデンティティー構成に力を貸すという認識関心において、私の意見としては、純粋な学問史同様、純粋な理論史の優先という考え方も禁じられる。社会学的に必要な道具を忘れようというのではないが、私の頭に浮かぶものは、精神や文化の、同時代的な一つのパースペクティブである。

実際の研究は、六つの部分に区分される。B章において、第一段階として、新しい学問の独自性の生成と発展の社会学的分析について、従来から提出され、研究されたあらゆる問題設定が考慮に入れられるような、一つの学問社会学のプログラム(wissenschaftssoziologisches Programm)を紹介したい。第二段階で、われわれは、この手の研究において重要だと思われる初期ドイツ社会学者の登場人物の範囲(Personenkreis)を限定する。第三段階で、われわれは、さらに研究が赴く15の研究仮説を表わす。第四段階で、われわれは、これら研究を導く仮説の明言を導いた先行知識を明かにする。

C章において、初期ドイツ社会学の生成と発展の分析に関する従来の研究の位置を批判的に描き出さねばならないが、ここでは、初期ドイツ社会学に対するこれら従来の社会学的研究の異なった方法論的接近の仕方を示し、議論することが先ずは問題である。第二に、従来の研究の提出する成果を、われわれ独自の研究の出発点にまで仕上げる。その際、初期ドイツ社会学の学問的制度化の諸過程について詳述するにあたり、独自の成果を補足しながら研究の出発点がかたどられる。

D章において、初期ドイツ社会学の生成と発展の学問外在的諸条件に取り組む。第一段階において、われわれは、近代化概念の発展の簡潔なスケッチにしたがって、これを、最もアクチュアルな社会科学的苦心の公分母として紹介し、18世紀から今日に至るまでのた



くさんの変動過程を研究しようと試みている。従来の歴史学的近代化研究の成果についての試みを示す概観と並んで、われわれは、独自のドイツの発展に取り組む。その際、われわれにとって、結果も、その結果の主知的な形成も重要である。第二段階において、19世紀中葉に始まるドイツの人口構造の変化、とりわけ、ブルジョワ中間層の分化と不統合の過程について研究する。そこで示される教養ブルジョワと有産ブルジョワとの間の緊張は、初期ドイツ社会学者に関するわれわれの後の整理にとって最も重要な成果として役に立つ。第三段階で、ドイツのインテリ層、とりわけドイツの高等学校教員を取り扱う。その際、われわれは、とりわけ政治的な点で、彼らの自己理解に取り組む。第四段階で、世紀の転換期におけるドイツ高等学校の社会構造を把握する中で、われわれは、一般的な近代化過程と初期ドイツ社会学との間の多元的な組み合わせに関する言明を取り扱おうと試みて、それら相互を照らし合わせる。

E章において、われわれは、学問の制度化の過程に集中する際に、初期ドイツ社会学の生成と発展のいくつか選び出された学問に内在的な諸過程に取り組む。初期ドイツ社会学の社会的ゲシュタルト (Sozialgestalt)と観念的ゲシュタルト (Ideengestalt) <sup>(2)</sup> についての描写は、すでにわれわれの研究独自の重点、つまり初期ドイツ社会学の生成環境にまで導くに違いない。

これは、F章において、四つの段階で論じられる。第一段階に、学問の社会学という観点から、われわれの環境 (Milieu)の概念を定める。第二段階で、三つの「大環境」に専念する。そこで、とりわけ初期ドイツ社会学にとって、特に重要なものについて評価する。第三段階で、初期ドイツ社会学者の世代継承の努力に着手し、第四段階で、四つの「集合的経験」(kollektive Erfahrungen)を取り扱う。われわれは、それらを、初期ドイツ社会学者や、彼らの社会学を知るための、等しく際立った意味として整理する。

結びとなるG章では、研究の最も重要な成果を一つの文脈で整理する。ひとつひとつの成果や観察の多数を統合するのに適していると確信するその文脈とは、ドイツの政治文化の概念である。本書は、先にも述べた初期ドイツ社会学の「原則的な構造上の欠陥」を明かにすることから、現在や未来の社会学に対するいくつかの「教訓」を討議しようというわれわれの試みで終わる。

## 注

(1) 以下これからの下線はケスラー自身による強調である。

(2) ここでの「ゲシュタルト」という訳は、原語 Gestalt そのままの読みであるが、これは、ゲシュタルト心理学におけるゲシュタルトを意識している訳ではない。これはケスラー本人にインタビューで確認済みである。辞書にある日本語では、姿、形、形態、外形、形式、現象、状態、様相、形態などが考えられるが、本書においてこの概念は多くの含みをもっている。したがって、日常用語からは異化された形で、文面において際立たせられねばならない。「かたち」とひらがな表記したり、なんらかの新しい言葉を考えるという方法もあり、再検討の可能性もあるが、今回は「ゲシュタルト」のままで発表したい。